

1 研究主題

一人ひとりが輝き、主体的に取り組む子どもの育成
～一人ひとりが書く楽しさや喜びを味わい、生き生きと取り組む書写学習～

2 研究主題について

- (1) 「一人ひとりが輝き」とは、一人ひとりが自分から進んで学習に取り組み、共に生き生きと学ぶ中で互いに認め合い、自己を見だし、豊かに高め合っていく子どもの姿ととらえる。子ども達が生き生きと活動し、学校生活の中で自分を輝かせることができると自信につながり、将来における自己実現への一歩となっていくと考える。
- (2) 「主体的に取り組む」とは、課題意識をもち、適切な支援を受けたり仲間の考え方に学んだりしながら、意欲的にねばり強く、自分で追求・解決していこうとする姿ととらえる。主体的に学ぶ力を支えるものとして、「基礎・基本が定着していること」「見通しをもって自力解決に臨めること」「学べる場（かかわり合える場）が保証されていること」が大切である。そして、主体性をもたせるには、楽しさを実感させるとともに、チャレンジ（がんばろう）・発見（わかった）・輝き（うれしい）、という成就感、達成感を味わわせる授業展開の工夫が必要である。
- (3) 「書く楽しさや喜びを味わい」とは書写の学習過程の中で、自分のめあてをしっかりとち、めあて達成のために進んで練習するという主体的な活動を通して「文字を書く」楽しさを実感したり、自分の思いやがんばりを友だちや先生、かかわりのある人から認めてもらうという経験を積み重ねていくことを通して「文字を書く」喜びを感じたりして、「文字を書く」ことへの関心や意欲を高めていく姿と考える。自分の活動や作品をふり返り「うまく書けた。」と実感できた時に、楽しさも増してくる。また、自分の書いた作品を評価してくれる人がいるということは、相手を意識して取り組む姿勢をつくっていく上でも、とても大切なことと考える。書く楽しさや喜びを見いだすためには、「人とかかわり」が不可欠である。さらに、書写授業で学んだことを生かして各教科や行事との関連をもった作品に取り組み、作品を通していろいろな人とかかわっていくことは、達成感や満足感が味わえることであり、心を豊かにしてくれるものと考えます。
- (4) 「生き生きと取り組む」とは「書写の学習は、おもしろい」「文字をもっと書きたい」と、一人ひとりの子どもたちが、目を輝かせて取り組む姿と考える。書写の時間が好きになったり、学習意欲が高まったりするためには、興味・関心のもてる授業づくりを工夫することが必要である。特に、低学年では、楽しさやおもしろさを感じることができる活動を、多く取

3 研究主題設定の理由

- (1) 社会の要請から

今、社会で求められている「生きる力」の育成を目指す観点から、書写のあり方を考えるとき、生活に生きて働く文字感覚や書写能力の育成が大切だと考えられる。

書写は伝統的な日本の文化であり、文字を正しく整えて書くことは書写を含む国語科の学習にとどまらず、生涯にわたって人として生活を営んでいく上での基本的能力ともいえる。しかし、IT革命の時代、パソコンや携帯電話等の普及により、大人も子どもも文字を書くということから遠ざかる生活にあり、文字の乱れがすすみ、文字を正しくていねいに書こうという意欲も減退している傾向にある。書く文字の形や筆順なども正確でないことが多い。そこで、これからの学習や生活の中で書くことに楽しさや喜びを見い出し、日常生活の中で役立てようとする意欲を育てることは、豊かな自己実現のために大切なことである。書写学習を充実させることは、生涯教育の基礎作りと考えられる。

書写の学習においては、技能重視の教師主導型の授業から、児童一人ひとりが書く楽しさや喜びを味わい、生き生きと取り組む授業への転換を図る時期にきている。書写力の向上と同時に、広がりのある様々な活動や経験を通し「生きる力」の向上に努めていきたいと考える。

(2) 学校教育目標から

本校の学校教育目標は「思いやりの心と学ぶ意欲を持ち続ける足守の子どもを育てる」であり、「すすんでする子ども」「やさしい子ども」「げんきな子ども」をめざす子ども像として具現化に努めている。それらは、子どもをかけがえのない存在として捉えるものであり、児童に生きる力を育むことを目指すものである。

書写学習においても、すすんで学習に取り組む態度、友達と励まし合い向上していこうとする気持ちなどは学習の基盤となる大切なものである。書写学習全般を具現化の場と考え、本校のめざす子ども像に迫りたいと考える。

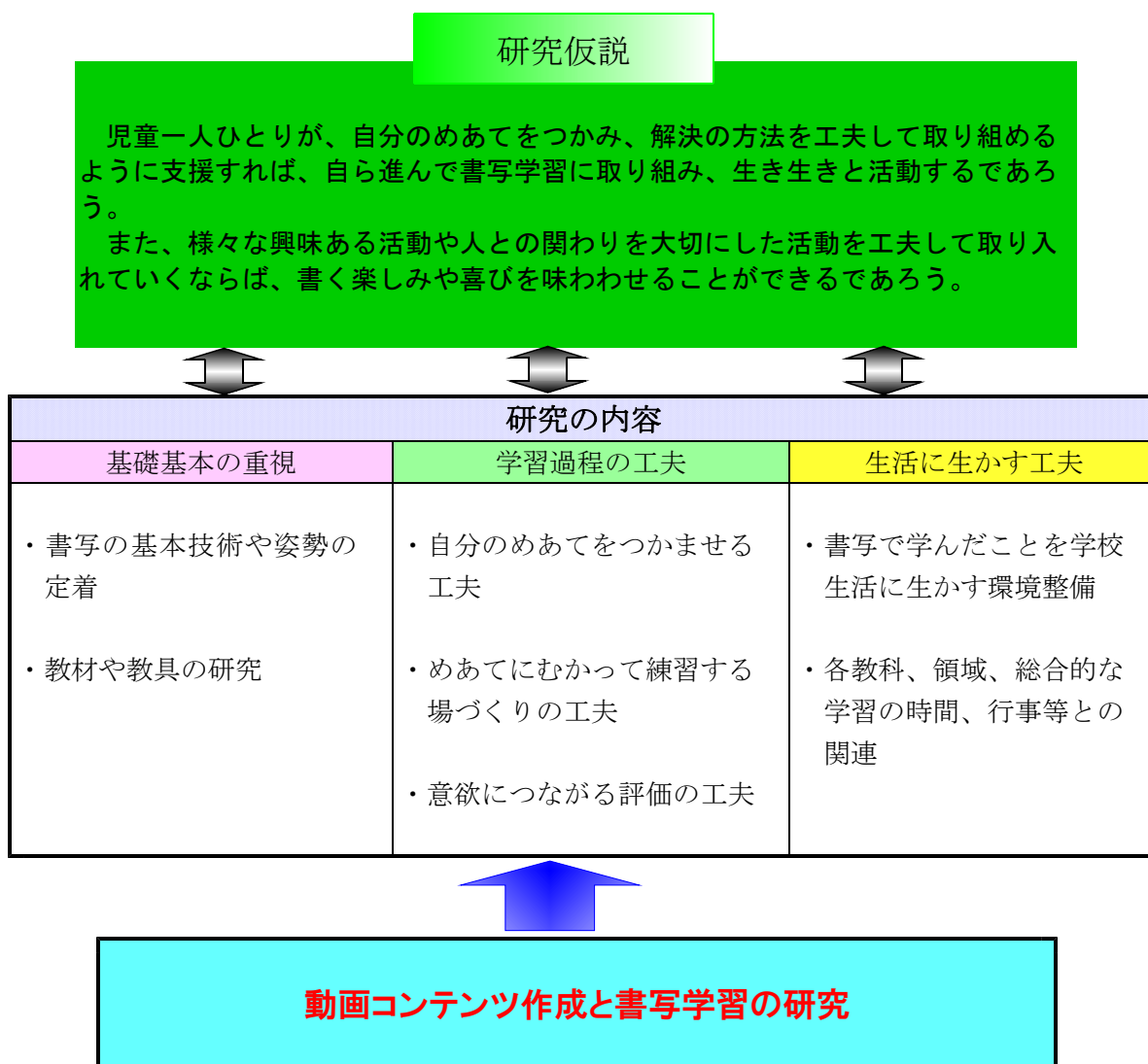
(3) 児童の実態から

児童を取りまく文字環境は多様で、雑誌・テレビ・パソコンなど様々な文字に出合う機会に恵まれている。しかし、一方では自分で文字を書く機会が少なくなっており、文字を正しくていねいに書くことができるとは言いきれない。児童の「書写」に関する実態をみると、筆順や文字を書く時の正しい姿勢や執筆が年々低下しつつあるように思われる。また、鉛筆を正しく持つことのできない児童、姿勢のくずれやすい児童、丸文字・漫画文字を学習場面で使う児童等、気になるところである。

このような実態をふまえ基礎・基本の定着を図り、児童一人ひとりが達成感のもてる授業の展開を工夫したり、文字環境を整備し、文字感覚の育成に努めたりすることなどを通して、研究主題に迫りたいと考える。

4 研究仮説と内容

研究主題「一人ひとりが書く楽しさや喜びを味わい、生き生きと取り組む書写学習」にせまるために、以下の3つの視点を中心に研究を進めた。



手本は、静止した文字である。文字を書くという動きを知るには、その動きの状態を見せていくことが大切である。

点画の基本的な筆使いを理解し、習得するためには、静止した手本だけでなく“動く手本”としての“動画コンテンツ”作成の必要がある。

研究の視点①基礎基本の重視

(1) 書写の基本技術や姿勢の定着を図るための工夫

- 正しい姿勢・執筆の意識づけく図の掲示・声かけ・合い言葉>

習字道具の置き方写真掲示

書く姿勢の写真掲示



座り方

椅子には深くかけすぎないようにして、背もたれとの間をにぎりこぶし二つ分ぐらいあけて座る。背筋はまっすぐに伸ばして、腹と机の間にもにぎりこぶし一つ分ぐらいあける。

足の位置

足は少し開いて床に足の裏全体をつけると自然で安定する。書くときは、右肩が左肩よりやや前に出るので、右足を少し前に出して、体重をつま先にかけてぎみにするとよい。

手の位置

左手の構えが大切である。右肘を少し上げる懸腕法の場合は、左手の手のひらを机の上に置いて、上体を安定させ、半紙を軽く押さえる。手首からひじは机の上にそえないようにする。また、はねや払い、終筆の際は半紙が動きやすいので、必要に応じて筆の下方に左手を移動することが必要である。(動く文鎮)

目の位置と頭の傾き

目は紙から30センチぐらい離して、右目の下から右胸の前で文字を書くようにする。頭は左右に倒れないように保ち、少し前に傾けて、文字や紙面全体を広く見渡すことができるようにする。

毛筆名人 七かじょう

- 一、足はペタンゆかの上
- 二、せすじはピン
- 三、おなかとつくえにグー一つ
- 四、筆の持ち方 二本がけ
- 五、筆を立て
- 六、左手おさえ
- 七、うでを使って 書きましょう！

- 筆の部分の名前（軸・穂・穂先）や始筆・送筆・終筆などの毛筆用語の定着（授業を能率的にする。）

(2) 教材や教具の研究

作品ばさみ



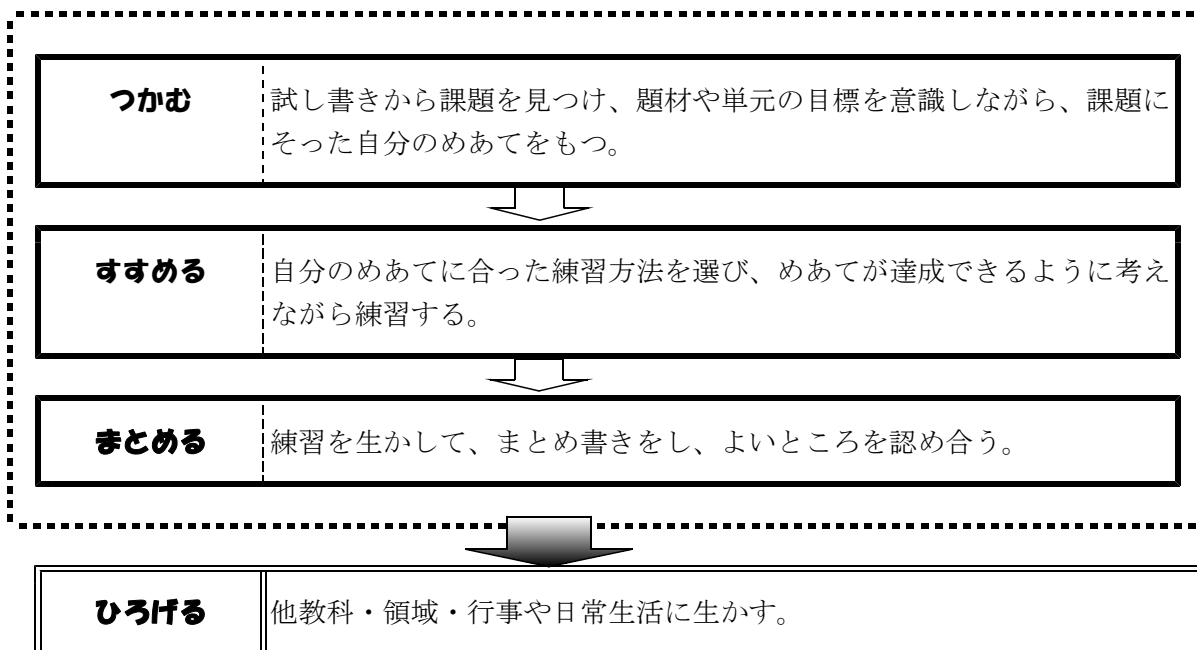
始筆時計



筆かけ



研究の視点②学習過程の工夫



児童の主体的な活動を中心とした課題解決学習となるように、学習過程を工夫した。また、学習過程を「つかむ」「すすめる」「まとめる」「ひろげる」としてパターン化することにより、児童の意識の流れを明確にして、一人ひとりが見通しを持って学習できるようにした。

(1) 自分のめあてをつかませる工夫

- ・ 手本を見ないで試書したものと手本を比べる。
- ・ 手本に物差しを当てたり、補助線を引いたりして基準を見つける。
- ・ 拡大した手本をもとに、全員で発見した基準を話し合うことを通して、題材のねらいに合っためあてを明確にする。
- ・ 動画コンテンツを見て、筆使いや筆の運び方を知る。
- ・ カードに記入して、次時へつなげる。

(2) めあてにむかって、練習する場づくりの工夫

- ・ 練習用紙の工夫
- ・ 分解文字を使って文字の組み立てを考える。
- ・ 動画コンテンツを見ながら練習できる場づくりの工夫

(3) 意欲につながる評価の工夫

- ・ 隣同士で書字過程を見合うことで、めあてを意識し、お互いの伸びに気付かせる。
- ・ 試し書きとまとめ書きを比較しやすいように作品の掲示を工夫する。
- ・ 作品掲示を見ながら、よいところを見つけ、お互いの伸びを発表することで、互いに認め合う喜びを感じ、成就感や達成感を持たせるようにする。(相互評価)
- ・ たしかめカードの観点にそって振り返ることで、めあてに向かって努力した満足感を味わうことができるようにする。(自己評価)
- ・ 個別評価表を作成し、個に応じた指導に生かす。



研究の視点③生活に生かす工夫

(1) 書写で学んだことを学校生活に生かす環境整備

- ・ 廊下や教室の掲示を手書き文字で書く。
- ・ 筆や墨をいつでも利用できるよう、習字コーナーを設ける。
- ・ 教師の板書や掲示物は、学習したことを生かしてていねいに書くよう心がけ、児童の文字意識を高める。

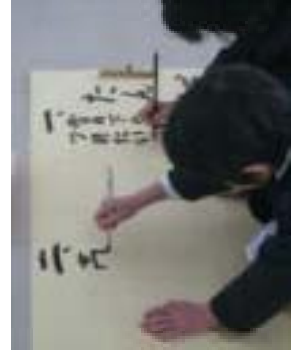
学級目標



係活動の掲示



朝の会の歌を書く



(2) 各教科・領域・総合的な学習の時間・行事等との関連

- ・ 書写の授業で学習したことを、新聞・ポスター・招待状・手紙・めあてカードなど書く時に生かせるようにする。

総合的な学習の新聞



今年のめあて



卒業式の掲示



チャレラン大会



お別れ会のくす玉



第2学年国語科書写指導案

平成19年2月8日（木）第5校時

指導者 鈴木 里美

1. 単 元 横 画 「 一 」

2. 目 標

- 自分のめあてを決め、めあてにそった練習方法を選び、すすんで学習に取り組むことができる。
- 自分や友だちの伸びのよさを見つけ、認め合うことができる。
- 横画の筆使い（始筆・送筆・終筆）ができる。

3. 指導計画

第1時・・・試し書きをして、めあてをつかむ。

第2時・・・自分のめあてにそった練習方法を選び、ていねいに書く。（本時）

4. 指導上の立場

- 第3学年の毛筆を使用する書写の学習は、姿勢・執筆から始まり用具の準備や後片付けまで、まさに基礎・基本を学ぶべき重要な時期である。この入門期においては、筆を使って文字をていねいに書こうとする心構えをもたせることが大切である。そのためには、正しい書写の姿勢や正しい執筆が要求され、習慣づけるまでには、ゆとりをもって繰り返し指導していかなくてはならない。そこで、「筆はどんなふうに持ったらいいのか。」「墨はどれくらい含ませたらいいのか。」「筆はどのように動かしたらいいのか。」「筆はどのように後始末をしたらいいのか。」など、毛筆書写の基本をていねいに指導していきたいと考え、本単元を2年生の3学期に設定してみた。児童が筆で文字を書くことを楽しみ、意欲的に取り組もうとする態度を身につけることによって、興味を持ってスムーズに第3学年の毛筆書写につなげることができる考えた。
- 本学級の児童は、今までに、用具の準備・小筆で書いてみようを1時間、毛筆書写のよい姿勢と大筆の持ち方・片づけの仕方を1時間、大筆で太い線、細い線を書き分け、試し書きをして自分のめあてをもつ学習を1時間経験している。大筆で文字を書くことが初めての児童が21名中19名である。児童は筆を使って書くことに意欲的で、書写の授業は楽しいと感じている。本題材を指導することにより、自分のめあてにそった練習方法を選び、練習することで、よりよく書けるようになった喜びを味わせたい。
- 本校の研究主題「一人ひとりが輝き、主体的に取り組む子どもの育成～書く楽しさや喜びを味わい、生き生きと取り組む書写学習～」に迫るため、児童が書くことを楽しんで学習できるように学習過程を工夫した。

まず、「めあてをつかむ」時間では、手本と試し書きを比べて「一」の始筆・送筆・終筆などについて、気付かせる。時には、物差しを当てたり、補助線を引いたりして話し合う。さらに、筆使いを見るため動く手本（動画コンテンツ）を活用することで、「ああ、このように書けばいいのか。」という認識を深めたい。分析した手本と自分の試し書きを比較することで、自分のめあてを見つけやすくする。

本時の「すすめる」段階では、各自のめあてに沿った練習をする手だてとして、籠字の練習用紙を準備する。さらに、筆使いや筆の運び方を確かめるために、動画コンテンツを見ながら水書用紙に練習できるコーナーを設ける。また、筆使いをお互いに見合う時間を作り、書き進む過程（書字過程）を重視した学習の場を設定する。書字過程を大切にすることで、いっそう筆の使い方や書き進むリズム等を意識して練習に取り組めると考えた。

「まとめる」段階では、まとめ書きしたものと試し書きをならべて掲示することで、自分や友だちの伸びを見つけやすくし、お互いに認め合うことで、上達したことの喜びを味わわせテーマに迫りたい。

5 本時案（第2時）

目 標		○ 横画の始筆・送筆・終筆に気をつけて、自分のめあてにそった練習をし、ていねいに書くことができる。 ○ 自分や友だちの作品のよさや伸びを見つけることができる。			
学 習 活 動		教 師 の 支 援		評価内容	準備物
つかむ	1 学習のめあてを確かめる。	○ 前時に決めためあてを発表することにより、自分のめあてを意識して取り組むことができるようにする。 ○ 前時の手本を提示することにより、文字の形を整えるポイントを確認できるようにする。		自分のめあてを確かめている。	用具配置図 拡大手本
	横画の始筆・送筆・終筆に気をつけて、ていねいに書こう。				
すすめる	2 練習をする。	○ 動画コンテンツを見せることで、筆使いや筆の運び方を意識して意欲的に練習に取り組めるようにする。 ○ 自分のめあてにそった練習ができるように、練習の場を設定したり、練習用紙を準備したりする。 ・ 練習用紙は自由に取れるように置く。 ・ 動画コンテンツを見ながら水書用紙に練習できる水書用紙コーナーを設け、自由に使えるようにする。 ○ 一人ひとりの児童がめあてに沿って練習できるように声かけしたり、手を添えて書いたりする。		自分のめあてを意識しながら練習する。	練習用紙 動画コンテンツ 水書用紙
	3 「一」の筆使いをお互いに見合う。	○ お互いの書字過程を見合うことで、姿勢や筆使いを再確認させ、より意欲的に練習に取り組めるようにする。		姿勢や筆使いに気をつけて、丁寧に書く。	

ま と め る	4 まとめ書き をする。	○ 自分のめあてを確認することで、めあてを意識したまとめ書きができるようにする。		
	5 いいところ を見つけ合う。	○ 全員の試し書きとまとめ書きの作品を掲示したのを見て、作品のよさや上達ぶりを見つけて、発表することで、がんばったことを認められる喜びを味わわせる。	自分や友達のよくなったところに気付く。	
	6 カードに記 入する。	○ 「たしかめカード」の観点にそって学習を振り返りながら、よかった点をほめ、次の学習につなげる。		たしかめ カード
	7 後片付けを する。	○ 後始末の方法と順序を示す表を提示することで、ていねいに後始末ができるようにする。		後始末の 表